イスラーム世界研究　第７巻（2014 年３月）276–297 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 7 (March 2014), pp.276–297

現代モーリタニアにおけるアラブ・イスラーム文化の諸相

竹田　敏之*

Perspectives on the Arab-Islamic Culture in Mauritania

TAKEDA Toshiyuki

The purpose of this article is to clarify the cultural characteristics of Mauritania (known by the name of *Bilād Shinqīṭ*) which do not appear to have been discussed in detail so much in the field of Islamic area studies despite the historical importance of this country. Mauritania is often called *Balad al-milyūn shā'ir* the "Coutry of million poets" because of the eloquence of the people and their intense awareness of the Arabic language and its literature. This study, will observe the social-cultural features which are mainly based on the *Hassānīya* language (one of the Arabic dialects) and consider how the identity of the people, their Arabism and their culture, have been formed in relation to this language. This study also focuses on the activities of the intellectuals from this country called *al-'Ulamā' al-Shanāqiṭa* who played an important role in the education and the transmission of the knowledge of Islam, not only in Mauritania and the western Saharan region but also in the Arab world, especially in the Eastern Arab countries (*al-Mashriq*). This point of view attempts to reconsider Mauritanians from the perspective of "the modern Arab world" tracing their intellectual activities and their contributions to the enlightenment and modernization of Arab countries such as Egypt, Iraq, Kuwait and Saudi Arabia especially from the *Nahḍa* "Renaissance" period to the modern era. This study also pays attention to the role of the Arabic media since the independence of Mauritania in 1960, referring to how Mauritania has been reported by journalists and writers in the Arab world and how the people's attitude and awareness toward Mauritania has been changed, which in turn implies that Mauritania nowadays has come to be considered more consciously and positioned more clearly than before as one of the Arab countries.

はじめに

本論の目的は、これまでアラブ・イスラーム研究としてあまり扱われることがなかったモーリタニアを対象に、地域の主要言語であるアラビア語とその言語社会を分析しながら、同国の文化的特徴を明らかにすることにある。またモーリタニアを、「現代アラブ世界」という視点から捉えなおし、モーリタニア人の知的活動について、より広域的に考察することを試みる。また、本研究では、これらの考察を通じ、現代モーリタニアを研究する上での新たな視座と分析方法の有効性についても検討を行うものである。

本論の構成は、まず第１章でモーリタニアという国とそこに生きる人々について概観し、先行研究を跡付けながら、研究上の問題点と課題について明らかにする。次に、第２章で、モーリタニアの言語文化を扱い、同地域のアラビア語である「ハッサーニーヤ方言」を対象に特徴を分析し、モーリタニア人の言語観について考察する。続く第３章で、モーリタニア出身の知識人を意味する「シンキーティー知識人」の知的活動に焦点を当てながら、アラブ世界における現代モーリタニアの新たな位置付けを提起する。

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員・非常勤講師

I. モーリタニアの概観と研究課題

1. モーリタニアとは

「東はアラビア半島のオマーンから、西は大西洋に面したモーリタニアまで」。これは、現代アラビア語の主要な使用地域を説明する際の、最も一般的な表現の一つである。モロッコの南方、サハラの西端に位置するモーリタニアは、正式国名をモーリタニア・イスラーム共和国とし、国民がすべてムスリムの国である。言語については、憲法でアラビア語を国家の唯一の公用語と規定し、同時に国語の一つとしている[1)]。このように主要言語をアラビア語とするモーリタニアは、現在22ヶ国あるアラブ連盟加盟国の一つ（1973年加盟）でもある。また、モーリタニアはしばしば「百万人の詩人の国」（balad al-milyūn shāʻir）というユニークな渾名で呼ばれるように、アラビア語の詩作に長けたその国民性で知られている。

その一方で、マグリブ諸国や西アフリカの国々同様、フランスの植民地支配を経験した国の一つでもある。現在モーリタニアとなっている地域は1903年にフランスの保護領となり、1920年にフランス領西アフリカの管轄下に置かれた。現行の国名であるモーリタニアは、「黒」を意味するギリシア語のMauros（英語でムーア）に由来し、ローマ帝国で使われた後、近代の植民地化の過程でフランス軍[2)]が採用した呼称である。その呼称が1960年の独立後も継承された。しばしば、モーリタニアを「ムーア人の国」や「ムーアの民族」と説明する記述があるが、モーリタニア人が自らを「ムーアの出自」と称することは決してなく、また「ムーア」という民族意識も存在するものではない。これらは外部からの視点による呼称であり、社会内部の実態やモーリタニア人の帰属意識を反映したものではないということに注意する必要があろう。

植民地時代に入る前は、モーリタニアはシンキートの国（bilād shinqīṭ）と呼ばれていた。シンキートの語源については「陶器の一種」あるいは「キート山の麓」を意味するアラビア語起源説や、「馬の目」を意味するベルベル語[3)]起源説など諸説あるが［Wuld al-Nātī 2011: 70–74; Wuld al-Sālim 2012: 392］、現代ではモーリタニア南東部のアドラール地方にある町の固有名であり[4)]、かつては現在のモーリタニアにほぼ相当する広い地域を指す名称であった。モーリタニア人の多くは、今もなお自らを、「シンキート出身」を意味するアラビア語の形容詞で「シンキーティー（複数形はシャナーキタ）」と称する。歴代の人物のみならず現代であっても、人名の一部にシンキーティーとある者は、すなわちこの地域の出自あるいはその家系にあることを意味している。本論では、混乱を避けるために近代以前であっても、特に言及がない限り時代を問わずモーリタニアやモーリタニア人という言い方を用いることとする。

1）1960年の独立直後に制定された1961年憲法では、「アラビア語を新たに国語とし、フランス語は公用語とする」（第3条）と規定されていたが、1991年の新憲法では「国語はアラビア語、フラニ語、ソニンケ語、ウォロフ語であり、公用語はアラビア語である」（第6条）とあるように、国語については他の民族語を加え、公用語についてはフランス語を排除しアラビア語のみとした。

2）フランス軍のザビエル・コッポラーニ（Xavier Coppolani）が1899年12月から「モーリタニア」という呼び方を始めたとされる［Zabbāl 1967: 87; Wuld Ibn Aḥmīda 2009: 18］。ローマ時代の属国マウレタニアに因んで付けられたと言われているが、マウレタニアは前ローマ時代に地中海沿岸に建国されたマウリ部族の王国を継承する呼称で、現在のモーリタニアとは地理的にも無関係である。

3）モロッコをはじめマグリブ諸国では、ギリシア語で「意味不明なことばを発する（人）」「野蛮人」「未開人」などを意味する「ベルベル」という用語を避け、「自由人」「高貴な人」を意味する「アマズィグ（アマーズィーグ）」を使う傾向が、公私の文化振興などを背景に近年ますます強くなっている。しかし、モーリタニアではこの「アマズィグ」という意識は極めて希薄であり、用語自体が普及していないこと、さらに言語についても「アマズィグ語」と称することはなく、「ベルベル語」もしくはその方言の「ゼナガ語（アーズナーゲ）」［Taine-Cheikh: 1990: vol.5, 922］という呼び方が一般的である状況に鑑み、本論では「ベルベル」という用語を使うこととする。

4）現在シンキートと呼ばれている町は、1261年に再建設された地域で、「古いシンキート」と呼ばれる地域は、別名アーッバイル（ābbayr）（776年建設）として知られていた。アーッバイルとは、アラビア語で「井戸」を意味するビウル（bi’r）の縮小形ブアイル（bu’ayr）を語源としている［Wuld al-Nātī 2011: 73］。

2013年現在、モーリタニアの人口は約330万人であり、アラビア語で「白い人々」を意味するビーダーンと呼ばれるアラブ系が8割を占め、残りの2割が「黒人」を意味するズヌージュである。この呼び方自体は、「色」を基準にしているが、ビーダーン（アラブ）であるかどうかを決定付ける要素は、血統的アラブ性への意識と、母語がアラビア語であるか否かの言語にある。つまり、肌が黒褐色であろうが、出自がベルベル系であろうが、15世紀にイエメン系アラブ遊牧民のハッサーン族が到来して以降、婚姻などを通じてアラブの血統を有していれば、あるいは少なくともその血統意識さえあればビーダーンとなる。さらに血統より重要なのは、歴史的に同地域に生じたアラブ化の結果として、母語のアラビア語化が達成されていればビーダーンとしての社会的認知が成立するのである[5)]。

アラブ遊牧民がモーリタニアにもたらしたアラビア語は、その部族名を冠してハッサーニーヤ方言と呼ばれる。つまり、換言すればモーリタニアにおけるビーダーンとはハッサーニーヤ方言の母語話者ということになる。これに関連して、ハッサーニーヤ方言の地理的領域は、アラビア語でトゥラーブ・ビーダーン（アラブの地）と称される。一方で、ズヌージュは一般的に、モーリタニア社会における黒人系とその社会階層[6)]を指すが、言語社会的には隣国セネガルやマリ、ニジェールなどにも広がるフラニ語（プラール語）、ウォロフ語、ソニンケ語を母語とする人々を意味し、その中にはアラビア語を全く運用できない者も少なくない[7)]。

このように、モーリタニアという国とその地域の人々は、アラブの血統意識やアラビア語と密接な関係の中にある。次節では、モーリタニアに関する先行研究を振り返り、問題点を明らかにしながら、本研究の視座を述べていく。

2. 先行研究と本研究の視座

前節で触れたように、現代アラビア語に関する地理的な説明ではよく登場するモーリタニアであるが、隣国の観光大国モロッコや西アフリカの大国セネガルなどに比べると、わが国では圧倒的にその知名度が低い。それに比例するように、モーリタニアに関する研究も非常に限定的で、分野やディシプリンを問わず、ほぼ研究上の空白領域となっている[8)]。

また、先行研究の欠如に加え、モーリタニアの位置付けが曖昧かつ判然としないという問題が指摘できよう。地理的には、アフリカの北西部、サハラの西端に位置するため、まずは西アフリカや北アフリカという地域設定が可能となる。また80年代以降に中東・北アフリカを中心に地域統合の動きが強まると、モーリタニアはマグリブ連合（1989年に結成）の一員という立場が出てきた。その意味では、マグリブ地域に位置付けられることもあり得る。一方で、20世紀中葉のアラブ・ナショナリズムの高揚以降、アラブ諸国のモーリタニアという立場がつねに強調されてきた。アラブ諸国の総体を「アラブ世界」と呼ぶならば、モーリタニアをアラブ世界の一部に位置付けることが可能となろう。

5）婚姻を通じた血統のアラブ化と母語のアラビア語化が進んだ結果、現代のモーリタニアでは、出自がハッサーニーヤ族系のアラブなのかサンハージャ族系のベルベルなのかは、社会的にも言語的にも、そして血統においても意味をなさなくなっている。

6）ズヌージュの階層により限定した呼称に、ハラーティーン（ḥarāṭīn）という言い方があり、奴隷の子孫や召使いの身分を意味する［Dia 2007: 325; al-Jīlānī 2008:198–199］。

7）その背景として、フランスの植民地支配による「アラビア語の禁止・フランス語の推進」という言語政策に対して強く抵抗を続けたビーダーンとは対照的に、ズヌージュには比較的好意的にフランス式の学校教育が受容され、フランス語使用が普及したことが挙げられる。

8）例えば、日本におけるイスラーム地域研究のガイド［三浦他編 1995; 小杉他編 2008］でも、モーリタニアに関する研究はマグリブとアフリカのいずれにおいても挙げられていない。

従来の研究では、この「アラブ世界」のモーリタニアという視点はなく、アラブの歴史を総体的に扱った［佐藤編 2002］でさえ、モーリタニアを対象とはせず、巻末の地図からも除外されている。また、近年刊行されたエリア・スタディーズシリーズの「現代アラブ」編［松本編 2013］においても、モーリタニアについては、ソマリアやジブチ、コモロなどと並び「中東のアラブとは異なる固有の民族的文化的背景」［松本編 2013: 6］を理由に対象から外されている。

モーリタニアが扱われるとすれば、これまではマグリブや北アフリカ、または西サハラや西アフリカを対象とした歴史研究においてであり、それも分散的かつ限定的な記述にとどまっている。例えば、［宮治 2000］は、世界現代史シリーズのアフリカ現代史編の北アフリカ（マグリブ〔マグレブ〕）という地域設定の中でモーリタニアを断片的ながらも扱っており、また［私市 2004: 11, 14, 19］は、サハラ交易路における要衝としてもモーリタニアに言及している。近年の研究では、［苅谷 2012］がこれまで無文字社会によって表象されるような従来の西アフリカ研究に批判を投じ、セネガル、モーリタニア、モロッコにおける膨大なアラビア語の写本・著作群を丹念に調べ、その蓄積を精緻に分析・整理しながら、同地域におけるアラビア語一次資料の重要性を明らかにした。

しかし苅谷の先駆的な研究も含め、いずれの先行研究もモーリタニアを主要対象としたものではなく、宮治［2012: 36］が巻末の文献解題で指摘しているように、モーリタニアの通史や現代史についてはまとまった文献はなく、外国語であっても［Gerteiny 1967; Arnaud 1972; Pazzanita 2008］などレファレンス的な著作や、西サハラへのアラブ遊牧民の到来を扱う［Norris 1986b］のような歴史研究に限られ、包括的研究の欠如という状況が今も続いている。

一方、言語学や文学では、ハッサーニーヤ方言を分析対象とした古典的研究の［Cohen 1963］をはじめ、近年の［Dia 2007; Taine-Cheikh 2007b］や、文法的考察を行った［宮本 2010］、マリ共和国のハッサーニーヤ方言を記述した［Heath 2003; 2004］などが挙げられる。さらに口承文学としてのハッサーニーヤ方言とその韻律学の理論を考察した［Norris 1968a; 宮本 2011］や、フォークロア研究の［Odette Du Puigaudeau and Marion Sénones 2002］などがある[9]。その多くが言語をありのままに記録しようとする記述言語学的な方法論をとっている。その結果、よりミクロな視点から、ハッサーニーヤ方言を一つの言語として分析しているのが特徴である。

このような先行研究を踏まえ、本論文では次のような研究上の視座を提示する。第一に、ハッサーニーヤ方言を単に記述的に分析するのではなく、モーリタニアにおけるアラブ文化とモーリタニア人のアラビア語意識という視点から考察し、その言語的特徴を明らかにするということである。第二に、モーリタニアという国・地域をアラブ世界という視点から捉えるということである。第三に、対象地域とアラブ世界の歴史を踏まえつつ、現代的視点から動態的にモーリタニアを捉えるということである。このことは、第二の視座と関わりながら、東アラブ地域、特に湾岸諸国におけるモーリタニア知識人（シンキーティー知識人）の台頭を分析対象とすることにつながっていく。最後に、モーリタニア人による研究を積極的に取り入れるということである[10]。近年では教育の普及や海

9）さらに、モーリタニアの旅行記［Pavard 1999; Odette Du Puigaudeau and Marion Sénones 2000］や、ワラータの紋様や建築美術を扱った［Tauzin 1993］などもモーリタニア文化を対象とした先行研究として挙げることができよう。また他の言語については、モーリタニア南部で使われているベルベル語（ゼナガ方言）を文法・語彙の面から記述した［Nicolas 1953］や、セネガルとの国境の町カエディにおけるソニンケ語話者を対象に統語・形態の面から考察した［Diagana 1995］がある。

10）イスラーム地域研究の最も標準的なレファレンスである『岩波イスラーム辞典』［大塚他編 2002: 514］では、「シンキート」はフランス語の綴りによる「シンゲッティ（Chinguetti）」を見出し語として採用している。モーリタニア人の母語がアラビア語であること、そして苅谷［2012］が明らかにしているようにシンキート地域の歴史的意義、そして本論の第３章で論じるように現代アラブ世界における同地域出身のウラマー知識人の重要性に鑑みれば、フランス語ではなく原語に近い「シンキート」のほうがより相応しく、同辞典の方針やスタイルにも合致するように思われる。

外との学術的交流の広がりを背景に、モーリタニア人の中からもモーリタニアの歴史や文化、またハッサーニーヤ方言を対象とする研究が徐々に出始めている。こういった最新の研究動向を検証し、研究に反映させることで、現在進行形のモーリタニアの姿がより正確に描き出せると考えるからである。

II. モーリタニアにおけるアラビア語の特徴

1. ハッサーニーヤ方言と北アフリカのアラブ化

モーリタニアにおけるアラビア語は、他のアラブ諸国と同様、ダイグロシア（二言語変種の併用・使い分け）の状況にある［Sounkalo 2008: pref. 3］。すなわち、書きことばや改まった場面での発話に用いられる高位変種のアラビア語と、日常の話しことばのアラビア語が、社会的場面や話し手・聞き手の社会的地位・関係性などに応じて住み分けられ併用されている[11)]。前者は正則アラビア語（一般にフスハー）と呼ばれ、アラブ諸国すべての共通語であり、書物をはじめ雑誌や新聞など印刷物はほぼすべて、この正則語で書かれる[12)]。一方、ハッサーニーヤ方言は民衆語としてのアラビア語にあたり、モーリタニアにおける日常会話のほかに、同地域で育まれたルグナ（ləghne[13)]：正則語でアル・ギナーに相当）やテブラーウ（təbrāʿ）と呼ばれる歌謡や詩、口承文学など豊かなフォークロア文化を培ったきた。

一般的にアラビア語の方言は、地理的な分布によって、エジプト方言やマグリブ方言、カイロ方言やダマスカス方言、ヒジャーズ方言（アラビア半島の紅海沿岸部）など、国や都市名、地域名を冠して呼ばれるが、モーリタニアの場合は、アラブの部族名に由来するという点で特異である[14)]。ハッサーニーヤ方言という名称は、15世紀にモーリタニアに到来した、イエメン出自のアラブ遊牧民であるマアキル族系のハッサーン族（バヌー・ハッサーン）に由来する。このハッサーン族による移住と支配が、同地域のアラブ化に決定的な影響を与えた。ここで言うアラブ化とは、言語社会のアラビア語化、すなわち住民の母語がアラビア語として生得される過程を意味する。

マグリブ地域を始め北アフリカのアラブ化は、イスラームの大征服による7世紀から9世紀にかけての第一段階と、ファーティマ朝のエジプトが西方に送ったアラブ遊牧民の移住にともなう11世紀の第二段階の2つを契機として進展した［Versteegh 1997: 96, 164］。第一段階で、都市部が部分的にアラブ化し、第二段階で、土着の遊牧民が住む地方にまでアラブ化が浸透した。この第二段階は「ヒラール族の西方移住（taghrība banī hilāl）」で知られる大移動で、北アフリカに樹立したベルベル人の地方政権であるズィール朝（973–1148）打倒のために送り込まれた諸部族のヒラール族（バヌー・ヒラール）に由来する。ファーティマ朝は、自分たちへの忠誠を放棄しバグダードのアッバース朝による宗主権を認めたズィール朝を牽制するために、上エジプトに居住していたヒラール族、続いてスライム族、そしてマアキル族などアラビア半島出身の遊牧民を相次いで差遣した［ʿUmar 1992: 286–287; Būsamāḥa 2008: vol.1, 76–77］。

11）ただし、ダイグロシア論については従来より様々な批判があり、特にマグリブ諸国などの多言語社会や、近年のソーシャルネットワークの普及などによる言語社会の変容を説明するには適した理論とは言えず、その限界が指摘されている［竹田 2010: 21–22］。

12）さらに正則アラビア語は、近現代以降アラブ諸国が共有する国語として整備され成立した現代標準アラビア語と、重厚なイスラーム文明の歴史の中で受け継がれ、現代に至るまでイスラーム世界のウラマー知識人を結ぶ知的共通語として機能しているアラビア語の2つの変種を想定できるが、ここでは深くは議論しない。詳しくは、［竹田 2009 106–111; 2010］を参照。

13）転写については、『岩波イスラーム辞典』方式によるが、ハッサーニーヤ方言の一部については、［Cohen 1963; Taine-Cheikh 1989–1990, 2007a; Sounkalo 2008］を参考に、子音連続の回避などで挿入される曖昧母音（シュワー）には [ə] をあて、「ア」の母音が「イ」の音に近づく現象「イマーラ」の音には [e] を用いた。

14）このような部族名による方言は古典期によく見られる。例えば碩学スユーティー（1505年没）によるアラビア語学の総論『ムズヒル（輝光）』では、アラビア語の正則性について、クライシュ族のことばを筆頭に、カイス、タミーム、アサド、フザイル、キナーナ、タイイなどの部族名を挙げている［al-Suyūṭī 1998: vol.1, 167］。

こうしたアラブ遊牧民による進撃は、同地域の政治的混乱を招き、その後北アフリカの各都市は小国乱立の状態に入るが、言語面で言うと基層言語であったベルベル語社会をアラブ化していく大きな契機となった。すなわち、移住してきたアラブ遊牧民の母語であるアラビア語がベルベル社会に普及し、母語のアラビア語化を促進した。おおよそヒラール族はリビアの西国境から西方、チュニジア領に住みついたのに対して、スライム族はリビアの西国境から東方、つまり現在のリビア領に住みつき［加藤 1996: 67］、現在のモロッコ地域にマアキル族が定着した。15 世紀にモーリタニア地域にアラブ化をもたらしたハッサーン族は、このマアキル族から派生した部族である。

モーリタニアへのイスラームの浸透は、それより前のムラービト朝時代（1056–1147）に急速に進んだとされ、モロッコ地域より南下したベルベル系サンハージャ族が内陸の沙漠部へと進軍しながら移住を始め、12 世紀にはベルベル語を基層言語としたイスラーム社会が形成された。15 世紀に生じたハッサーン族の移住と支配は、このベルベル系の言語社会を根底から変革する大きな出来事であった。その変革の過程では、当初より「アラブ」と呼ばれた支配層のハッサーン族と、イスラームの知の担い手であったサンハージャ族が衝突や争いを重ねながらも、イスラームとその言語であるアラビア語を紐帯にしながら、地域のアラブ化とイスラーム学の普及を加速させた。その結果、16 世紀にはシンキートや、ワーダーン、ティシートといった学術都市が栄え、サハラ地域におけるイスラーム学の中心地となっていった［Ibn Aḥmad 1996: 56–57; Wuld Ibn Aḥmīda 2009: 62–68］。

言語について言えば、外来のアラブ系と基層のベルベル系などが婚姻・混血を繰り返しながら、アラビア語の母語化が浸透していき、モーリタニア地域の言語社会を形成していったと考えられる。モーリタニア史の専門家で著名な歴史学者の一人であるウルドゥ・サーリムによれば、3 世紀を経て 17 世紀には、アラビア語化のプロセス、すなわち同地域におけるハッサーニーヤ方言の母語化がほぼ完了したとされる［Wuld al-Sālim 2010:193–194］。現在のモロッコでは、約 40 パーセントのベルベル語話者がいるが、モーリタニアでは基層言語であったベルベル語（ゼナガ方言）は、セネガル国境付近の一部（トラールザ州など）を除きほぼ消滅し、「アラビア語のハッサーニーヤ方言を母語とする者はビーダーン（アラブ）である」というアイデンティティが確立している［Wuld al-Sālim 2010: 191; Taine-Cheikh1988: vol.1, pref. 19］[15)]。

2. アラブ遊牧民のことばとモーリタニア人の言語観

ハッサーン族がもたらしたアラビア語の特徴は、端的に言えば、遊牧民のことばであり、その出自や生活様式を反映している。一般的に、「ヒラール族の西方移住」によってアラブ化した北アフリカおよびマグリブ地域のアラビア語は、アラビア半島を出自とするアラブ遊牧民のことばの影響を強く受けている。その影響の一つは、カーフ（qāf [q]）の音を有声音のガーフ（gāf [g]）で発音するという現象に現れる［Heath 2002: 1］。これはモロッコやリビアの遊牧民の他、上エジプトやシナイ半島、そして湾岸諸国でも広く観察される現象である。アラビア語学ではこれを一つの基準にハッサーニーヤ方言を遊牧民方言と位置付けている［al-Any 1967: 22; Taine-Cheikh1988: vol.1, pref. 44］。

この遊牧民という特性は、音声面のほかに語彙や表現に色濃く表れている。例えば、「テントに入る」を意味する派生形第 5 型 tkhayyəm（正則語 takhayyama）は「結婚する」を意味し、「テントの持ち主」mūlə l-khayme（正則語 māl al-khayma）は「夫」を意味する。また、「雨」については「雲」

15）アラブ化は、アラビア語で「タアリーブ（アラブ化すること）」と呼ばれるが、歴史学者のウルド・サーリムをはじめ、モーリタニアの研究者は、同地域のアラブ化にタアーリブという用語はあてず、「自ら」アラブになるというニュアンスが強い派生形第 5 型の名詞形で「タアッルブ」という用語を使う傾向が強い［Wuld al-Sālim 2010:194; Wuld Ibn Aḥmīda 2009: 63］。

sḥāb（あるいは mzūn）を用い、「雲がやって来た」əs-sḥāb jāt（正則語 jā'a al-saḥāb）とすることで「雨が降った」を表現する。他にも、「大地」trāb（turāb 埃）、「明日」əṣ-ṣbəḥ（al-ṣubḥ 朝）、「お月さま」shhar（shahr 一か月）、「週」səbte（sabt 土曜日）、「南」gible（qibla キブラ）のように、現代の正則語で一般的な括弧内のような意味と関連性を持ちつつも、異なる意味や古典的意味を日常語として使っている例が少なくない。ハッサーニーヤ方言研究者のテーヌ・シャイフによれば、語彙の80～90％はアラビア語起源である［Taine-Cheikh 2007a: 249］。例えば、エジプトで「やかん」のことを barrād と言うように、モーリタニアでも bərrād（複数：brārīd）が一般的に使われている。これは古典的な用法に barradtu al-mā'（私は水を冷やした）と表現することで「お湯を沸かした」を意味するように、語根（b/r/d）の「冷たい」という意味とは逆の「熱い」を表す対義語（aḍdād）と呼ばれる語彙用法である［'Abd al-Tawwāb 1980: 128］[16]。

こうした遊牧民的な語彙や表現、古風さなどを根拠に、ハッサーニーヤ方言はしばしば「正則語（フスハー）に最も近い方言」と評されることがある［Gerteiny 1967: 82; al-Naḥwī 1987: 41; Wuld Abāh 1987: 11; Wuld al-Sālim 2005: 49］。モーリタニアの言語・文化を扱う文献では必ずと言っていいほどこの点に言及がある[17]。「どの方言がフスハーにより近いか」というこの種の議論は、古くはジャーヒズ（868/9年没）などの古典期の文人から［池田 1992: 119–120］、現代のアラブ人までがよく好む話題として知られている。言語学的根拠は置いておくとしても、この「フスハー言説」が流布する背景は、モーリタニアの言語社会の特性を読み解くためにも、若干の考察を加えておく必要があろう。

この言説の背景には、ハッサーニーヤ方言というアラブの部族名にも表れているように、自分たちがアラビア半島のアラブ部族の系譜を引いているという血統的アラブ性への強い意識がある。このアラブの部族的血統とアラビア語との関係の中に、言語の正則性が論じられてきたのである。ここで言う正則性とは、「純粋な／雄弁な」（ファスィーフ）アラビア語という意味である。何をもって「純粋」であるかの基準は、伝統的なアラビア語学が定義する「例証の時代」に関係する。文法家たちは8世紀中葉以降に始まる文法学の規範化の過程において、純粋なアラビア語の語彙や表現を求め、現在のサウディアラビア内陸部にあたる地域を中心に、アラブ遊牧民をインフォーマントとした調査の旅を行った。今で言うところのフィールドワークに相当する。外部の言語文化と接触の少ない遊牧民こそが純粋なアラビア語を保持していると信じられていたからである[18]。その調査を通じ、アラブ遊牧民の言葉づかいを対象に、言語データの収集と記録が徹底的に行われた[19]。このデータが、文法学や辞書学における「例証」（shawāhid）の大部分を占めており、ことばが「純粋」であるかを判断する重要な根拠と位置付けられるようになった。その時間的範囲が「例証の時代」であり、遊牧民の場合は10世紀（ヒジュラ暦4世紀半ば）までとされている。

こうした伝統原理が必ずしもモーリタニア社会に継承されているわけではないが、モーリタニア人にとっては、アラビア半島の「古き」アラブ遊牧民こそが、生粋のアラブ人であり、ことばのお手本と位置付けられ、しばしば憧憬の対象となってきた。それゆえに、現代においてもアラビア語

16）対義語の代表的な例は、bā'a（買う／売る）である。一般的には「買う」の意味で使われるが、対義語として「売る」の意味もある［内記 1964: 127, 133］。

17）筆者も臨地調査（2013年2月24日～3月17日実施）でモーリタニア人に接していると、ハッサーニーヤ方言と正則語の関係性を強調する場面に幾度となく出会うことがあった。

18）ウマイヤ朝カリフや貴族の中には、この純粋な言葉づかいを学ばせるために、一定期間、息子や子弟をアラブ遊牧民のもとへ送ったという伝承が伝えられている［Versteegh 1997: 50］。

19）例えば、ハリール（789/91没）やキサーイー（804没）といった言語学者によるデータ収集の対象となったのは、外部と接触の少ないアラビア半島内陸部のアラブ諸部族で、おもに6部族（タミーム、カイス、アサド、フザイル、タイイ、キナーナ）に限られていたとも言われている［al-'Uṣaymī 2002: 684, 686］。

が「純粋」であるかどうか、そして言葉づかいが雄弁であるかどうかの一つの基準として、かつてのアラビア半島の部族方言や詩歌が参照点となってくるのである。このことを念頭に置きながら、モーリタニア人によるハッサーニーヤ方言の考察をもう少し詳しく見てみよう。

3. ハッサーニーヤ方言の特徴と現代的変容

モーリタニア文学を専門とするウルド・アバーは、ハッサーニーヤ方言が「正則語（フスハー）に最も近い方言」である根拠として、①双数形の保持、②派生形第7型による受動表現、③介在語なしのイダーファ表現（属格を用いて「AのB」を表す形式）、④動詞文における動詞と主語の性数一致、を挙げている［Wuld Abāh 1987: 11］。

①は、アラビア語方言では双数形の使用は限定的で、複数形語尾（-īn, -ēn）にとって代わることが多いが[20]、ハッサーニーヤ方言では「両耳」wədhneyn や「両脚」rəjleyn など体の対になる部位をはじめ、双数形語尾を保持した語彙（例えば、「2匹の犬」kəlbeyn など）が多数存在する［Taine-Cheikh 2007: 244; Norris 1968a: 196］。

②の受動表現は、例えばモロッコ方言では5型などで受身を意味し［Versteegh 1997: 167］、7型が使われることはない。それに対し、クウェート方言やサウディアラビアのナジュド方言では受動を意味する7型やその発展形の使用が活発である［Holes 2007: 618; Ingham 2008: 331］。

③は、例えば現代のカイロ方言では、「その教師の本」を il-kitāb bitā‘ il-mudarris と表現するように、方言の多くは、名詞（B）と後続する属格名詞（A）の間にビターア（bitā‘）、タバア（taba‘）、ハッグ（ḥaqq）、マール（māl）、ディヤール（dyāl）などの属格関係を示す介在語（genitive markers）を置くのが一般的である［Brustad 2000: 72］。一方、ハッサーニーヤ方言はそれとは対照的に、正則語と同じく介在語なしに名詞を並べる。

④は、古くはアラビア半島のタイイ族やフザイル族などに見られた言葉づかいで、古典期の文法学者たちはこの特徴を有する方言を「“ノミが私を食べた”方言」（lugha “akalū-nī al-barāghīth”）と呼んだ［Rabin 1951: 168］[21]。動詞文であっても qāmū al-Zaydūn（そのザイドたちは起立した）のように動詞を主語の性数に一致させるという、現代の文法規則から見れば明らかに逸脱している現象である。しかしこの現象を、ウルド・アバーらモーリタニア研究者は、古典期の「純粋な」アラビア語を参照点にすることで、ハッサーニーヤ方言を正則的たらしめる一つの根拠とした［al-Naḥwī 1987: 41］。例えば、モーリタニア人の会話や発話を記述した［Sounkalo 2008］のテクストでも、この「“ノミが私を食べた”方言」の特徴が多く観察される。ここでは分かり易いように、正則語に置き換えた転写を括弧に併記する。例えば、次ような文である[22]。

igūlu l-muritāniyīn（yaqūlū al-mūrītāniyyūn）（モーリタニア人〔pl.〕は言っている）

yəstaqəblū-hum l-muritāniyīn（yastaqbilū-hum al-mūritāniyyūn）（モーリタニア人〔pl.〕は彼らを歓迎して迎える）

‘ādu l-muritāniyīn sāknīn vlmudun（‘ādū al-mūritāniyyūna sākinīna fī al-mudun）（モーリタニア人〔pl.〕は都市部にも住み始めた）[23]

20）例えば、モロッコ方言では「耳」は単数 wdən ／双数・複数 wədnīn で、「脚」は単数 rjəl ／双数・複数 rəjlīn を用いる。

21）主語であるノミの複数形は非理性であり、かつ動詞が先行しているため、本来、活用は3人称女性単数で（akalat-nī al-barāghīth）となるべきところを、akalū（それらは食べた）という3人称男性複数にしている点を方言の特徴と捉えたのである。

22）以下の例文は上から順に［Sounkalo 2008: 6–7, 46–47, 64–65］の3か所を参照。

23）正則語で「戻る」を意味する動詞 ‘āda はハッサーニーヤ方言では「～し始める」の意味で使われる。また、

さらにハッサーニーヤ方言では、英語の接続詞 that に相当するアラビア語の辞詞 anna や an などで、語頭に来るハムザをアイン [‘] へ転換し発音する傾向が強い。この現象も、古典期よりタミーム族をはじめカイス、アサドおよびこれに隣接する諸部族の方言に見られるもので［池田 1992: 127］、「アヌアナ方言（lugha ‘an‘ana）」と呼ばれる。再び［Sounkalo 2008］のテクストから、いくつか例を挙げてみよう[24]。

nəbgi ngūl ‘lən（nabghī (an) naqūl ‘anna）（私〔pl.〕は～と言いたい）

wə qaṭ‘an ‘annə lāḥəẓnə（wa qaṭ‘an ‘anna-nā lāḥaẓnā）（確かに私たちは～に気が付いた）

ẓāhər li ‘an（ẓāhir lī ‘anna）（私には～と見える）

このようにハッサーニーヤ方言は、遊牧民の生活環境を反映した語彙表現が一つの特徴であり、また部分的ではあるにせよ、古典期のアラブ諸部族に通じるような言葉づかいが見受けられる。こうした特徴は、しばしば東アラブ地域の方言（特にアラビア半島）との近似性［Norris 1968a: 195］に関連づけられることがある。例えばスンカロはハッサーニーヤ方言について［Gerteiny 1967: 82］を引用し、「アクセントや抑揚は異なるが、古典アラビア語に近く、むしろイラクの山岳地帯やアラビア半島の遊牧民方言に似ている」という紹介をしている［Sounkalo 2008: pref. 3］。また、特にヨルダンの遊牧民は、ハッサーニーヤ方言の理解が容易であるという報告もある［Taine-Cheikh 2008: 171］。しかし、地理的に隣接するマグリブ諸国の方言からも少なからず影響を受けているし、基層言語であるベルベル語やソニンケ語の要素も看過してはならないだろう[25]。特に地名や人名などには基層言語の影響が色濃く残っている。

一方でハッサーニーヤ方言は書き言葉ではなく、口語であるため通時的な変化を受けやすく、近年では新しいユニークな形式が次々と生まれている。例えば、人称代名詞の1人称複数 nəḥne（正則語 naḥnu）は本来、男女の区別はなかったが［Taine-Cheikh 2007a: 242］、近年では女性だけの場合に nəḥnāt（女性複数）が使われるようになっている［Wuld Ḥabīb Allāh 2009: 174］。また、かわいらしさや愛着、時には惨めさや軽蔑を表す縮小形は、正則語やどの方言でも名詞および形容詞にのみ当てはまる形式だが、ハッサーニーヤ方言では動詞においても縮小形が生成される。例えば、「嘘をつく」yəkdhəb（正則語 yakdhib）の縮小形 yekeydheb で「小嘘をつく」、「泣く」yəbki（正則語 yabkī）の縮小形 yebeyki で「ちょっぴり泣く」の意味になり［al-Zubayr 2013: 83］、また「入りなさい」を意味する命令形 dkhəl（正則語 udkhul）の縮小形 ədeykhel で「入りたまえ」といった見下したニュアンスを出す用法も普及し始めている［Wuld Ḥabīb Allāh 2009: 174］。

ここまで、モーリタニアの口語であるハッサーニーヤ方言の特徴を抽出し考察を行ってきた。本章の冒頭で述べたように、モーリタニアの言語社会はダイグロシアであり、ハッサーニーヤ方言を口語としながらも、教育やメディアなど正則アラビア語を使用する日常の領域が大きく存在する。モーリタニア人にとっては双方ともアラビア語であり、決して一方が他方を排除するような対立関係にあるのではない。さらに、正則語を細分するなら、イスラームの普遍語としての伝統的なアラビア語と、アラブ諸国と共有する民族語としての現代アラビア語があり、1960年の独立以降はメディアの勃興や、交通手段の発達によるアラブ世界との交流を背景に、民族語としてのアラビア語への意識が急速に強まっている。こうしたアラブ諸国とのつながりの強化は、ハッサーニーヤ方言を文化基盤とするモーリタニアを、その伝統を保持しつつも、アラブ世界のモーリタニアへと変容

ファー [f] はしばしばヴァー [v] で発音される。例えば、前置詞フィー（fī）はヴ（v）で発音されることが多い。

24）以下の例文は、3例とも［Sounkalo 2008: 4–5］を参照。

25）例えば、ハッサーニーヤ方言で日常よく使う「さようならを言う」「見送る」を意味する動詞 ṣayvəṭ は、モロッコ方言で「送る」を意味する ṣifəṭ と同じくベルベル語起源である。

させる契機となっていった。次章では、モーリタニア出身のイスラーム知識人に焦点を当て、東方アラブ地域における活躍を跡付けながら、現代モーリタニアの位置付けについて検討を行っていく。

III. 現代アラブ世界とシンキーティー知識人

1. シンキーティー知識人と伝統教育「マフダラ」

第1章ですでに述べたように、現在モーリタニアと呼ばれている地域は、植民地支配を受ける以前は「シンキートの国」という名で知られていた。1960年に独立を果たし、国民国家としてのモーリタニアが成立した後も、モーリタニア人は自らを「シンキート出身」を意味する「シンキーティー」という形容詞（ニスバ）で名乗り、その出自に強い愛着と誇りを持ち続けている。特に、エジプトを中心に東アラブ地域が文芸復興の時代を迎える19世紀中葉を皮切りに、モーリタニア出身のウラマー知識人が、次々と東アラブで活躍し注目されるようになった。彼らは、「シンキーティー知識人」（al-‘ulamā’ al-shanāqiṭa）[26]の名で知られた。語感としては、商業や交易で名を馳せたイエメンのハドラマウトを出自とする人々を「ハドラミー」と称する呼び方に似ている。湾岸諸国をはじめイスラーム世界では、ハドラミーと聞くと「商才に長けた人々」を想起するように、シンキーティーと聞くと「遊牧のウラマー」「詩人」といったイメージが連想されるのである。シンキーティー知識人の、他に追随を許さぬ暗記力と、伝統教育によって養われた豊富な知識は、各地で一目置かれ、特にイラクやクウェート、サウディアラビアといった湾岸諸国では国づくりに欠かせない貴重な知性として必要とされた［al-Idrīsī 2009: 76, 318］。

モーリタニアのイスラーム教育は、ムラービト朝時代に始まったとされる「マフダラ」（maḥḍara）と呼ばれる移動型私塾を基盤とする。シンキーティー知識人は、みなこのマフダラでアラビア文字の読み書きを学び、クルアーンの暗誦を完了し、アラビア語諸学やイスラーム学を修めている。

マフダラという語は、「やって来る」「出席する」を意味する動詞ハダラ（ḥaḍara）の場所名詞である。ハッサーニーヤ方言では、ダード［ḍ］はザー［ẓ］で発音されるため、マフザラ（maḥẓara）と書かれることもある。一説によれば、「禁じる」を意味する動詞ハザラ（ḥaẓara）の場所名詞で、イスラームの知を学ぶ「聖域」が原義であるとも言われている［Ibn Aḥmad 1996: 65］。現在でこそモーリタニアでは定住が進んでいるが（8割は定住）、かつては遊牧が生活の基本スタイルであった。教師（シャイフ）を務めるマフダラの主催者もまた、住居兼私塾である自分のテントの拠点を、季節や環境によって、家畜や家族とともに転々と移動させた。その意味で、エジプトなどで知られるクルアーン学校の「クッターブ」や、スーダンの「ハルワ」［大塚 1996］とは学ぶ場であることは共通するが、元来は移動型であるという点で趣を異にする。2013年現在、モーリタニア全土に約8000のマフダラが存在する[27]。

植民地時代、フランスはモーリタニア人のアイデンティティの基底となっているアラビア語やイスラームへの帰属意識を変えようと、1906年6月よりアラビア語教育の廃止を推し進めた。すべてのマフダラに毎日2時間のフランス語教育を義務付け、フランス語の使用を奨励するマフダラには、毎月3000フランの補助金を交付する旨を公示したのであった［al-Rafī‘ī 2012: 148］。しかし、教師たちはボイコットを続け、アラビア語とイスラームの教育に徹する姿勢を変えず、マフダラをフランスによる言語政策に対する文化的抵抗運動の拠点と位置付けたのであった。

こうしたマフダラは、伝統的なイスラーム教育の場であると同時に、知の生産の場でもある。暗

26）シャナーキタ（shanāqiṭa）はシンキーティー（shinqīṭī）の複数形である。

27）モーリタニア・マフダラ連盟の総裁であるムハンマド・ハサン・スィバーイー氏への聞き取り調査（2013年3月5日実施）による。

記を最大限に重視するモーリタニアでは、語調やリズムゆえに覚えやすい韻文による教本テキストが好んで用いられている。現代でも文法学と言えば、モロッコのタンジェ出身の文法家イブン・アージュッルーム（1323年没）によって編まれた要綱『アージュッルーミーヤ』や、アンダルス出身の文法家イブン・マーリク（1274年没）の代表作である『千行詩』が広く使われている。この種の要綱は、一般にマトン（原義は本文）やナズム（韻文詩）と呼ばれ、さらに欄外を意味する「トゥッラ」や、備忘録を意味する「クンナーシュ」、さらに赤インクで記すことを意味する「イフミラール」と題した解説書がマフダラ教育の場で盛んに編まれた。

例えば、現代のモーリタニアではイブン・マーリクの『千行詩』への解説書として、イブン・ブーナ（1805/6年没）が著した『イフミラール』[Ibn Būnā 2003]が普及している。また同じくイブン・マーリクが著した『ラーム脚韻による動詞形態論』（*Lāmiya al-Afʿāl*）への解説書として、ウルド・ザイン（1810–1896/97）による『トゥッラ』[Wuld Zayn 2008]が人気を博している。この著作は、現代シンキーティー知識人として最も著名な学者の一人であるムハンマド・サーリム・ウルド・アッドゥード（1929–2009）が校訂し解説を加え、その作業を「裁縫」（khiyāṭa）に喩えたことで、別名『ヒヤータ』の名でも一般に知られるようになった。アッドゥードは、現在、サウディアラビアをはじめ、湾岸諸国で人気を博しているシンキーティー知識人ムハンマド・ハサン・ウルド・ダドゥ（1963–）の師にあたる。さらに、要綱で言えば、カタルのムフティーを務めるエジプト出身の法学者カラダーウィー（1926–）の著書で英訳もされた『ハラールとハラーム』も、シンキーティー知識人のムハンマド・サーリム・ウルド・マフブービー（1936–1992）による韻文詩（*Naẓm Kitāb al-Ḥalāl wa al-Ḥarām*）となって再生産されている。

また、マフダラ教育の特徴として、「ラウフ（木板）」と呼ばれる書字版の使用による書承の重視を挙げることができよう。刊本は今も一般的ではなく、特にクルアーンについては刊本を用いるのは上級者か教師に限られている。一般的な学習者は、教師からの口頭伝承を基本としつつも、暗記の対象となるテクストについて、教師が書写した書字版を使いながら暗記を進め、次のレベルで自らの筆で書字版への書写を行っていく。この過程を通じて、クルアーンの読誦は音と綴りに加え、読誦に関わる諸記号のすべてを覚えることが課題とされる。そして、それをすべてクリアした段階で初めて、伝承経路を有するイジャーザ（免状）を授与され「ハーフィズ（暗記している人）」となれるのである。

このような教授法を背景に、モーリタニアでは、クルアーンに特化した綴り（ラスム）や諸記号（ダブト）の修得を目的とするラスム学習が広く普及している[28)]。そして、書承に欠かせない書字版は、マフダラ教育と密接に関わる学習道具としてだけでなく、先祖代々受け継ぐ貴重な家財とも位置付けられているのである。シンキーティー知識人のナースィルッディーン・シンキーティー（1675年没）は、書字版を「知識」に喩え、知識をつねに追究することの重要さを説き、「馬に乗る者はみな、鞍の前部と自分との間に書字版を置くがいい。無知はその者にとって最後の審判の日に最も醜いものとなる」。という有名な言葉を残している[al-Idrīsī 2009: 76]。

こうしたマフダラの伝統教育[29)]によって培われたモーリタニア人の教養の高さは、東アラブ地域（マシュリク）との人的交流や印刷メディアの勃興などを背景に、「シンキーティー知識人」の名

28）マフダラにおけるラスム学習では、『明解ラスム学』（ターリブ・アブドゥッラー・ジャカニー著 1834年頃没）[al-Jakanī 2004]と、『ラスム学宝典』（ラールバース・シンキーティー著）[al-Shinqīṭī 2008]の2つの教本が一般に使用されている。後者については、2006年 モーリタニア・イスラーム学書最優良賞を受賞している。

29）こうした伝統教育の基盤として継承されてきたマフダラは、モーリタニア人男性が着る民族衣装の「ダッラーア」や、客人のもてなしには欠かせない「アターイ（茶）」などと並び、モーリタニア人の文化アイデンティティを表象する重要なキーワードになっている。

とともにアラブ世界で知られるようになり、20 世紀中葉にはモーリタニアを「百万人の詩人の国」と評する呼び方［Zabbāl 1967: 70］や、「クルアーンはアラビア半島（ヒジャーズ）で啓示され、エジプトで朗誦され、トルコ（の書道）で書かれ、モーリタニアで暗記される」［Mawlāy 2008: 5］いう表現までが登場するようになった。

次節では、東アラブ地域で活躍したシンキーティー知識人を具体的に取り上げながら、モーリタニアという国がいかに現代アラブ世界で知られるようになったのか、その流れを検討する。

2. ナフダ期におけるシンキーティー知識人の台頭

19 世紀に歴史的シリアやエジプトなどで隆盛した文芸復興は、アラビア語とその歴史遺産の価値を再評価し、アラブ地域の文化的紐帯を強化することを目的としていた。19 世紀後期から 20 世紀初頭にかけては、シリア・レバノンの知識人が文化活動の拠点をエジプトへ移し、アラビア語による出版文化と古典復興を支えた。また、この 19 世紀という近代は、イスラーム世界が西欧列強の侵略支配に晒され始めた危機の時代でもあった。帝国主義に対抗すべく、イスラーム･ウンマ（共同体）の連帯がアフガーニー（1838/9–97）をはじめアブドゥ（1849–1905）やリダー（1865–1935）などのイスラーム知識人によって強く訴えられた。彼らが説く近代サラフィー主義は、18 世紀のアラビア半島で興ったワッハーブ運動の流れを汲む復興運動であると同時に、社会内部からの改革と近代文明との調和という新しい要素を持ちながら展開した。その中では、イスラームにおける原風景としてのアラブ的要素が強調され、アラブの優越性やイスラームの言語としてのアラビア語の重要性が説かれた。

こうした文芸復興やイスラーム改革運動の時代に、多くのシンキーティー知識人の活躍と貢献があったことはあまり知られていない。ここでは、エジプトでその存在感を発揮した 2 人のシンキーティー知識人を取り上げてみたい。

彼らにとって東方への旅とは、聖地マッカ・マディーナを目指した巡礼であり、同時に、知を求める旅でもあった。マグリブ地域からエジプト、そしてアラビア半島のヒジャーズ地方へと道中で出会うウラマーとの交流を通じ、自らの知見を広げ、知識を深めたのであった。

モーリタニアの歴史・人物伝・言語文化に関する基本文献である『ワスィート（中事典）』の著者アフマド・イブン・アミーン・シンキーティー・アラウィー（1872 頃 –1913）（以下、アフマド・シンキーティー）もまた、知識の旅と知識の普及に生涯を捧げた人物である。1897 年頃にモーリタニア中部タガーント州近郊の故郷を発ち、1899 年に巡礼を果たした後、シリアやトルコ、そしてジャディード運動[30]が勃興し始めていたロシアを遍歴し、その後 1902 年頃から晩年の 10 年間をカイロで過ごした。アフマド・シンキーティーは、出版文化が興隆していたカイロで、現エジプト国立図書館所蔵のタイムール文庫でその名が知られる文人アフマド・タイムール（1871–1930）や、カイロの老舗書店ハーンジーの創業者であるムハンマド・アミーン・ハーンジー（1865–1939）らと交友関係を築いた。シリアからの移住者の一人であったハーンジーは、それまで東アラブ地域では、ほとんど知られることなく、関心もまったく払われることがなかったシンキートの国について、アフマド・シンキーティーに執筆を依頼した。こうして生まれたのが、1911 年にハーンジー書店（1885 年開業､当時はジャマーリーヤ印刷所）から刊行された『ワスィート』である。この『ワスィート』こそ、シンキートの国およびシンキーティー知識人について包括的に記述した初の著作

30）ロシア領内のムスリム知識人らによる教育の革新、ムスリム社会とイスラーム文化の復興を目指したイスラーム改革運動。

で、その豊富な情報量ゆえに、現代に至るまで同地域に関する最も重要な文献に位置付けられている［al-Shinqīṭī 2002: vid. pref. 5］。

また、アフマド・シンキーティーは、碩学スユーティー（1505年没）の文法書『輝く真珠』（*al-Durar al-Lawāmi‘*）の校訂（1902）に始まり、10世紀のバグダードの文法家ザッジャージー（949または953年没）の講義を記録した『ザッジャージーの講義録』（1906）、ジャーヒリーヤ詩の詩集を詳説した『ムアッラカート詩解説』（1911）、イスファハーニー（967年没）の代表作である『歌の書』に関する訂正と補遺『歌の書への補遺』（1911）など多くの校訂本や著作を残した［al-Shinqīṭī 2002: vid. pref. 9］。

こうした古典復興への貢献の一方、彼の著作の中で特に異彩を放っているのが『ウマルの格変化に関する真珠の書』（1903）である。これは、人名「ウマル」の格変化に関して、2段変化という定説に異を唱え3段変化を主張したイブン・タラーミード（1829–1904）[31]への反論の書である。イブン・タラーミード（本名は、ムハンマド・マフムード・イブン・アフマド・トゥルクズィー[32]・シンキーティー）もまた、同時期に東アラブで活躍したシンキーティー知識人の一人である。彼は、furṣat-un（機会）の複数形がfuraṣ-unで3段変化であるならば、その語形パターンに鑑み、‘umrat-un（小巡礼）の複数形である‘umar-(un)は、類推により3段変化が適用できると主張し、文法学におけるイジュティハード（法規定導出の知的営為）の有効性を論じた［al-Maḥbūbī 2012: 234］。それに対しアフマド・シンキーティーは古典期からの例証によって2段変化の正当性を主張したのであった。この両者の白熱した論争は、「“ウマル”をめぐる格変化論争」（al-mas’ala al-‘umarīya）として知られている。このような文法論争は、アラブ文学史で登場する9世紀頃のバスラ学派対クーファ学派を想起させる。20世紀初頭という近現代にあって、同様の激しい論戦が繰り広げられた事実はユニークでもあり、また同時にシンキーティー知識人のアラビア語文法へのこだわりと関心の高さが垣間見れるのである。

イブン・タラーミードの活躍ぶりについては、エジプトの文人ターハー・フサイン（1889–1973）の『日々』で垣間見ることができる。少年（ターハー・フサイン）がアズハル学院での学生生活を回想する場面で「シャイフ・シンキーティー」の名で登場している。その中で、優秀な学生たちが、師であるイブン・タラーミード（シャイフ・シンキーティー）のアラビア語学やハディース学への造詣の深さと、伝承経路に関する正確かつ驚異的な暗記力にすこぶる驚いている様子が描かれている［Ḥusayn 1960: vol.2, 154］。ターハー・フサイン自身、イブン・タラーミードに傾倒した一人であり、エジプト大学（現カイロ大学）に1914年に提出したシリア出身の盲目の詩人マアッリー（973–1058）をテーマにした博士論文の指導教官は、イブン・タラーミードが務めた［Ḥanafī 2002: 6］。

イブン・タラーミードは、アブドゥや、アラブ地域初の言語アカデミー（1892年設立）の提唱者であるムハンマド・タウフィーク・バクリー（1870–1932）の庇護を受けながら、カイロを拠点にイスラーム教育から古典校訂に至るまで幅広い知的活動を展開した。言語アカデミー（通称バクリー・アカデミー）[33]の創設メンバーとして外来語のアラビア語化政策プロジェクトを牽引したり、アブ

31）「タラーミード」は、「生徒」「弟子」を意味するティルミーズ（tilmīdh）の複数形タラーミーズ（talāmīdh）に由来する。ハッサーニーヤ方言ではザール［dh］をダール［d］で発音する現象が多く見られる。モーリタニアでは、マフダラに参加する学生集団を一般にタラーミードと言い、一説によれば、父親のアフマドが主宰するマフダラが「タラーミードのテント」という名で知られており、次第に「その息子」を意味する「イブン・タラーミード」の渾名で呼ばれるようになったとされる［al-Shallāḥī 2004: 17; al-Maḥbūbī 2012: 210］。

32）モーリタニアのタガーント州やブラークナ州を中心に広がるトゥルクズ族のニスバ名。

33）正式名称は「アラビア語化（タアリーブ）制定のための言語アカデミー」である。メンバーには、アブドゥをはじめ、本節で扱っているムハンマド・シンキーティー（イブン・タラーミード）、ヒフニー・ナースィフ（1899–1969）といったイスラーム知識人や教育者を中心に50名から構成され、流布している外国語のアラビア語化を中心に議論を重ねた［al-Jamī‘ī 1983: 15］。次の例は、アカデミーが提示した外来語言い換え案の一部である［al-Maghribī 1953: 124］。

ドゥとの共同作業で、17巻に及ぶ古典的大辞典『ムハッサス（類聚抄）』（イブン・スィーダ〔1066没〕著）の校訂を1898年から3年間かけて完遂するなど、アラビア語の近代化や古典復興に大きな功績を残した。またリダーが主宰する『マナール』誌を通じて詩作を展開するなど文学活動にも余念がなかった。その学識の高さはリダーをして「このエジプトの地でアラビア語学、ハディース学において彼（イブン・タラーミード）の上に出る者は誰もいない」[al-Naḥwī 1987: 270] と言わしめたほどであった。こうしてシンキーティー知識人は、イスラーム学と出版文化が興隆するエジプトを中心に、知的教養語であるアラビア語の使い手として確固たる名声を博するようになっていった。

3. 湾岸諸国におけるシンキーティー知識人

シンキーティー知識人の活躍は、エジプトのみならず、アラビア半島の諸地域にも功績を残している。その中でも傑出した人物が、「吉兆」を意味するファール・ハイル（fāl al-khayr）[34]の名で知られるムハンマド・アミーン・シンキーティー・ハサニー（1876–1932）である[35]。

ファール・ハイルも他のシンキーティー知識人の例にもれず、広域な知の旅を展開した。1900年にエジプトに逗留した際、前節で登場したイブン・タラーミードの仲介もあって、アブドゥの歓待を受け、翌1901年にマッカ巡礼へと向かった。その後、インド、オマーン、バハレーンなどを遍歴するが、ファール・ハイルの知的活動は、当時オスマン朝下の一州であったバスラや、イギリスの保護領となったクウェート、さらにイスラーム改革運動の源流域であるナジュドで顕在化した。彼の貢献を端的にまとめれば、それはイスラーム教育の普及と学校建設であろう。クウェートでは、1912年設立の「慈善協会」（al-jamʿīya al-khayrīya）でハディース学を中心とした教職に従事し、クウェートの近代における先駆的な学校である「ムバーラキーヤ学校」の創設（1912年）にも深く関わったとされている[36]。首長家であるサバーフ家にも一目置かれる存在で、特に当時皇太子であったアフマド・ジャービル・サバーフ（現クウェート首長サバーフの父にあたる）とは共に巡礼に赴くほどの友好な関係にあった [al-Idrīsī 2009: 315]。

またイラクのバスラ州ズバイルでは、自身のイニシアチブで1920年に「ナジャー（救済）協会」を設立し、同名の学校を1923年に開校した [al-Dulayshī 1981: 177]。これが後に国立学校（madrasa al-najā al-ahlīya）となり、イラクのみならず、隣国ヨルダン、サウディアラビアの近代化に貢献すべく知性を輩出する東方アラブ地域きっての名門校へと発展した[37]。こうした知的活動を可能にした背景には、ファール・ハイルの人格や並々ならぬ豊富な知識に加えて、スンナ派の伝統的啓典解釈書『意味の神髄』の著者でもあるアルースィーなど多くの著名なウラマーや政府高官から一定の評価を得ていたことが挙げられる [al-Idrīsī 2009: 316]。

---

tilifūn（電話）→ misarra
burāvū（素晴らしい）→ marḥā
bunjūr（おはよう）→ ʿim ṣabāḥan
ṣālūn（サロン）→ bahw

34）正則アラビア語では、ハムザをともなって fa'l だが、ハッサーニーヤ方言ではハムザの脱落が多く見られる [Wuld al-Nātī 2011: 239]。

35）サウディアラビアでは、ムハンマド・アミーン・シンキーティーの名で知られており、ファール・ハイルという渾名は一般的ではない。しかし本論では、後述するムハンマド・アミーン・シンキーティー・ジャカニーとの混乱を避けるために、ムハンマド・アミーン・シンキーティー・ハサニーには、ファール・ハイルを用いることにする。なお、ファール・ハイルという名前は、彼の祖父名に由来する [al-Dulayshī 1981: 11 fn.]。

36）イラク人研究者のドゥライシーは、ファール・ハイルのムバーラキーヤ学校への関わりを否定している [al-Dulayshī 1981: 105]。

37）例えば、同校で学んだサウディアラビア人サーリフ・サーリフは、カスィーム州ウナイザに救済学校をモデルにした学校を1928年に開校している。この学校を訪問した初代国王アブドゥルアズィーズは、「このような学校をリヤドにも開校したい」と述べたと伝えられている [al-Idrīsī 2009: 320]。

ファール・ハイルの知的活動はサウディアラビアのナジュド地方へも広がっている。特に、ワッハーブ派運動の中心地として有名なカスィーム州のウナイザには、ズバイルへ逗留する前後に4年ほど滞在しており、イブン・タイミーヤのサラフィー思想に触れながら同地域の子弟教育に力を注いだ。現代のサウディアラビアで最も人気のある啓典解釈書の一つで、「サアディーのタフスィール」で知られる啓典解釈書『慈愛者・寛大者の神助』（*Taysīr al-Karīm al-Raḥmān*）（1925年初刊）[38]の著者アブドゥッラフマーン・サアディー（1889–1956）などを弟子として輩出している［al-Idrīsī 2009: 316］。サウディアラビア初代国王のアブドゥルアズィーズも、ファール・ハイルとウナイザで会合の場を持つなど、シンキーティー知識人の知性を歓迎しその貢献を高く評価した［al-Dulayshī 1981: 146］。

サウディアラビアは、建国の1932年以降も、系譜的アラブへのこだわりやイスラーム学への精通度の高さ、アラビア語の雄弁さゆえに、シンキーティー知識人の移住者を大いに歓迎した。1951年に、アブドゥルアズィーズ国王により「教養ある世代を輩出するプログラムキャンペーン」が打ち出されると、教育者として定評のあったシンキーティー知識人たちに以前にも増して注目が集まった。さらに翌1952年には、シンキーティー知識人の希望者には条件なしで国籍を与える国王勅令が出されている［al-Idrīsī 2009: 117］。リヤド、マッカ、マディーナの3都市を拠点に25年間進められたこのキャンペーンの成果は、1960年から1970年代に高揚期を迎えた。

こうしたサウディアラビアの近代化と教育の発展に最も貢献したシンキーティー知識人と言われる人物が、ムハンマド・アミーン・シンキーティー・ジャカニー（1905–1974）である［Ibn al-Ḥusayn 1995: 344］。ジャカニーとは、モーリタニアの有力部族タジュカーントを出自とするニスバ名で、シンキーティー知識人の中でも、特にウラマーを多数輩出してきた部族として知られている。シンキーティー知識人を扱う際、「ムハンマド」「アフマド」「アミーン」といった人名が似たように連なることが多いので注意が必要であり、前節のムハンマド・アミーン（ファール・ハイル）とは別の人物である[39]。

ジャカニーは1947年に巡礼でサウディアラビアに赴いた際、王族の一人であるハーリド・スダイリーに文学サロンで一目置かれ、その比類ない詩の才能とイスラーム学に関する博識ぶりは、瞬く間にアブドゥルアズィーズ国王に届くことになった。その結果、国王からの招請もあり、帰国の途につくことなく、そのままサウディアラビアを新天地に教育者としての人生を捧げることになった［al-Ṭawayān 1998 vol.1, 32–33］。マッカ、マディーナの聖モスクをはじめ、リヤドの高等学院などを拠点に啓典解釈学やアラビア語学、イスラーム諸学の講義を担当し、後にサウディアラビアの宗教界を牽引する多くのウラマーに影響を与えたとされる。中でも1993年からサウディアラビアの最高ムフティーを務めたイブン・バーズ（1912–1999）や、現代サラフィー主義のカリスマ的シャイフと称されるムハンマド・ウサイミーン（1929–2001）など名立たるウラマーが、ジャカニーに師事し弟子として名を連ねている［Mawlāy 2008: 415］。

マディーナの聖モスク（預言者モスク）で行った啓典解釈学の講義は、「クルアーンによるクルアーンの解釈」という独特の方法論を特徴としており[40]、1967年から『修辞の光（アドワーウ・バヤー

38）フルタイトルは、*Taysīr al-Karīm al-Raḥmān fī Tafsīr Kalām al-Mannān*。1923年から1925年にかけて執筆された（9巻）［Saʿdī 2001: vid. pref. 9–10］。

39）原語ではファール・ハイルのアミーンには定冠詞はないが、こちらのアミーンには定冠詞「アル」が付いている。ここでは『岩波イスラーム辞典』方式にならい、「アル」なしでムハンマド・アミーンと表記する。なお、サウディアラビアなどでは、一般にムハンマド・アミーン・シンキーティーの名で知られているが（ファール・ハイルのムハンマド・アミーン・シンキーティーとは「アル」の有無で区別されている）、本論では、同名の羅列による混乱を避けるために、以下、ジャカニーを使うこととする。

40）アラビア語の語法・語義など言語的側面については、ジャーヒリーヤ時代からウマイヤ朝（アッバース朝はわずか）にかけての古典詩（97人の詩人）を例証に解説している［Mawlāy 2008: 419–420］。

ン)』というタイトルの啓典解釈書[小杉 1994: 107]として刊行を開始した[41]。現在マッカの聖モスクでイマームを担当し、イスラーム世界で最も有名な読誦家の一人として活躍するアブドゥッラフマーン・スダイスは、1989年(ヒジュラ暦1410年)にウンム・クラー大学に提出した修士論文で『修辞の光』における分析とジャカニーの方法論をテーマにし、法源学や法学の諸問題を軸に分析・再整理することを試みている。その論文の中で『修辞の光』を「最も良質な啓典解釈書の一つ」と位置付けている[al-Sudays 1989: pref. Alif]。こうした著名なウラマーの評価もあり、『修辞の光』はサウディアラビアを中心に、高い人気を博した啓典解釈書となっている[42]。

またジャカニーは、マディーナ・イスラーム大学の創設(1960年)に関わった初期教授メンバーの一人であり、開校期からイブン・バーズが学長を務めた時期(1970–1975)にかけて教鞭をとった。さらに、第3代国王ファイサル(在位1964–1975)の主導で設立されたイスラーム世界連盟の創設メンバーとして、国内外のウラマーとの連携強化に尽力した。このように、ジャカニーは現代サウディアラビアの近代化とイスラーム教育の発展に欠かせない存在となり[43]、その功績ゆえに同国における「シンキーティー知識人」はある種の特殊な「ブランド力」を有しながら、社会的地位を享受するに至っている[44]。

4. 現代アラブ世界とモーリタニアの独立

これまで見てきたように、シンキーティー知識人は、東アラブ地域における文芸復興を支え、特にサウディアラビアでは建国以降、人材養成とイスラーム教育に欠かせない存在として必要とされた。そのような流れの中で、1960年のモーリタニアの独立はアラブ世界でどのように捉えられたのだろうか、印刷メディアの記述を素材に、本節で考えてみたい。

「アラブ世界」と言った場合、それをアラブ諸国の集合体として捉える考え方がある。この場合、一つの基準となるのが、アラブ連盟への加盟の有無である。言い換えれば、アラブ世界はアラブ連盟加盟国の総和ということになる。これに従えば、チャドやイスラエルはアラビア語を公用語とするがアラブ世界には入らない。一方、「アラブ世界」をアラビア語を話す人々の世界と捉える考え方も存在する。これは20世紀中葉にアラブ・ナショナリズムの理論化に努めた思想家サーティウ・フスリー(1883–1967)らによる「アラビア語を話す者がアラブ人である」という定義を基底にしている[竹田 2010: 17–19]。アラブ連盟への加盟国はアラビア語を少なくとも国語または公用語としているため、その国民をアラビア語の使い手と広く捉えるならば、自ずと総和論と重なる部分が大きくなる。

1945年のアラブ連盟の設立は、アラブ諸国という連帯とアラビア語を紐帯とするアラブ意識の確立に大きな役割を果たした。その後、50年代から60年代は、革命の時代でありナセルが主導するアラブ・ナショナリズムの最盛期であった。1960年のモーリタニアの独立はこうした時期に達成された。アラブ世界では、汎アラブ主義の影響は様々な形となって興隆を見せた。文化面で言えば、例えば

41)「抗議するする女性章(第58章)」22節のところで他界し未完であったが、弟子のアティーヤ・ムハンマド・サーリムが補遺(3巻)を著し完結した。ジェッダにあるイスラーム法学アカデミー(IFA :1981年設立、majma‘ al-fiqh al-islāmī)による版で7巻5618頁に及ぶ大書である[al-Shinqīṭī 2005]。

42) 前述のイスラーム法学アカデミー(IFA)は、シリーズでジャカニーの著作やフォトワー集、講義録などを再刊・刊行している。

43) ジャカニーには2人の息子がいる。一人はマディーナ・イスラーム大学の法源学(ウスール・フィクフ)学科長を務めたムハンマド・ムフタール・シンキーティーであり、もう一人は同大学クルアーン学部の学部長を務めるアブドゥッラー・シンキーティーである。同氏は、現在、マディーナの聖モスクで定期的に講義を行っている[al-Ṭawayān 1998: vol.1, 51]。

44) 1995年の統計で、マディーナ・イスラーム大学におけるモーリタニア出身の教授陣は60人に及ぶ[al-Idrīsī 2009: 122]。

1964年に、ユネスコのアラブ版として「アラブ民族（ウンマ）の記憶媒体、およびアラブ民族の遺産の宝庫としてのアラビア語の保持」を一つの理念として掲げる「アラブ教育文化学術機構」（ALECSO）がチュニスを本部に設立された［竹田 2010: 29–30］。また、アラブ文化の発信力と印刷メディアの勃興を象徴するカイロ国際ブックフェアーが開始されたのも、ナセルの晩年の1969年であった。

こうしたアラブ連盟の存在や文化的な汎アラブ主義の広がりは、それまで東アラブ地域にとってマグリブの僻地か西スーダンの一地域に過ぎなかったモーリタニア［Wuld al-Sālim 2002: 20–21］を、アラブ諸国の一員としての「アラブ世界のモーリタニア」へと位置付ける原動力となった。その背景として、アラビア語による印刷メディアが果たした役割を挙げることができよう。モーリタニアの独立を機に、雑誌や新聞におけるモーリタニアに関する記述が急増した。

その筆頭に挙げられるのが、1958年からクウェートの情報省が刊行する『アラビー』誌である。汎アラブ誌の代表格として知られ、今なお広い読者層を持つ『アラビー』は、1967年4月号（101号）で「ヌアクショット：私たちのアラブ世界の中で、最も離れた地にある最も新しい首都」という特集をカラーで掲載し、詩人の宝庫であるモーリタニアを「百万人の詩人（の国）」というキャッチフレーズで紹介した。当時のモーリタニアの人口は100万人ほどであり、まさにモーリタニアは「国民のすべてが詩人の国」ということになる［Zabbāl 1967: 70］。こうして生まれた「百万人の詩人の国」（balad al-milyūn shāʻir）というユニークな言い回しは、アラブ世界の人々に強烈な印象を与え、現在に至るまでモーリタニアの渾名として人々に親しまれ続けている。

さらに『アラビー』誌は同年10月（107号）でもモーリタニアを扱い、ジャーヒズの名著『けちんぼ物語』の校訂者として知られるエジプト人文学者ターハー・ハージリーによる「シンキートあるいはモーリタニア：アラブ文学史のミッシング・リンク」と題する論説を掲載した。その中で、アラブ文学史では18世紀から19世紀中葉を「低迷期」や「暗黒の時代」と位置付ける通説に対して、モーリタニアを例に、同地域では詩を中心とする文学作品が連綿とかつ大量に生産され続けてきたとして反論を展開した［al-Ḥājirī 1967: 32］。これは同時に、モーリタニアをアラブ文学の領域に含めるべきとする主張でもあった。ハージリーがモーリタニアに関して最も感銘を受けたのは、モーリタニア人のイスラーム諸学とアラビア語への関心の高さであった。彼は論説の中で次のように述べている。「シンキートこそアラブの国である。イスラームの到来以降、イスラームを信仰し続け、同様にアラビア語を日常の言語としてきた人々である。……血統としてのアラブに帰属意識を持ち、それを強く誇りに思い、言うならば、シンキートの人々こそ、他のアラブ諸国よりもアラブ性においてより由緒ある人々であろう」［al-Ḥājirī 1967: 29］。そして、『ワスィート』の著者アフマド・シンキーティーを筆頭に、東アラブ地域で活躍した著名なシンキーティー知識人に言及し、モーリタニアとアラブ世界との歴史的つながりを強調した。

アラブ・ナショナリズムの高揚を背景に、モーリタニアをアラブ世界と位置付ける論調は、独立の直後から顕在化し始めていた。例えば、汎アラブ紙で知られる『ハヤート』紙（1946年創刊）は、モーリタニア独立一周年を記念して、初代大統領ムフタール・ウルド・ダーッダーの言葉「我々はアラブであり、アラブ共同体（ウンマ）の一部である。その共同体から分離することはない」を大々的に掲載した［Wuld al-Sālim 2005: 259］。

また、自らシンキートの地へ赴き取材を行ったアラブ人知識人もいた。その一人が、レバノンのアーミル地方出身のジャーナリスト作家ムハンマド・ユースフ・ムカッリド（1913–1965）である。彼は、独立前から隣国のセネガルを拠点に、モーリタニアへの取材を重ね、『新生モーリタニアの今と昔：ブラックアフリカの中の白いアラブ』を1960年にベイルートから刊行した。その中で、

ムカッリドは、アラブ諸国の人々に力説する口調で「モーリタニアは、私たち（レバノン人）やあなたがたシリア人やイラク人よりも、アラブ人である。……レバノンでは私たちはフェニキア人であると主張したり、イラクではクルド人であると言う者があり、エジプトではファラオ主義を唱え、マグリブ諸国ではベルベル人と言う者があるが、モーリタニアは知られざる国ではあるものの、ここでは『私はアラブ人ではない』という者は私が知る限り誰もいない。……西アフリカに位置する‘フランスの’モーリタニアの民はダードとウルーバの旗を掲げた生粋のアラブ人（al-‘arab al-aqḥāḥ）なのである」［Muqallid 1999: 23; Wuld al-Sālim 2005: 257］。ムカッリドは、このようにモーリタニア人のアラブへの帰属意識の強さとアラビア語へのこだわりに衝撃を受け、この事実をアラブ諸国に伝えることを使命と感じたようである。その意志は、数年後の 1962 年に上梓した単著『古今のモーリタニア詩人たち』で結実し、モーリタニア人を「肌の色はイエメン、ヒジャーズと同じであり、ことばは明瞭なアラビア語」である［Muqallid 1962: 38］と描写し、アラブ性に加え、東アラブ地域との連関性を主張した。

このように独立を契機に、モーリタニアに関する記述がアラビア語による印刷メディアを通じて急速に増加した。メディアが映し出したモーリタニアは、まさにアラブの国であり、アラビア語やアラブ・イスラーム文化を基底とする特徴が強調された。東アラブ地域が発信するメディアは、現代モーリタニアをアラブ世界の文化的連帯の中に位置付けたのであった。

結語

本論では、まずモーリタニアにおける言語文化を明らかにするために、主要言語であるハッサーニーヤ方言を対象に、モーリタニア人の言語観に照らし合わせながらその特徴について考察を行った。その結果、モーリタニア人の言語表現における遊牧性と正則性への強い意識が顕著に観察された。次に、モーリタニアを論じる際の新たな試みとして、「シンキーティー知識人」を取り上げ、彼らの東アラブ地域への移動と活動について考察を行った。文芸復興期におけるエジプトでは、古典復興や出版においてシンキーティー知識人が重要な役割を果たした。特にサウディアラビアでは建国からその後の発展に至るまで、シンキーティー知識人がイスラーム教育や人材育成における欠かせない存在として必要とされた。また、1960 年の独立以降のアラビア語のメディアに注目し、現代モーリタニアがどのように報じられたのか、その実態を検証した。考察の結果として、現代アラブ世界を論じる上でのモーリタニアの重要性に加え、モーリタニアを論じる研究上の新たな視座としても、アラブ世界の展開の中にモーリタニアを位置付けることの有効性が明らかであろう。

参照文献

＜和文文献＞

池田修 1992「アラビア語方言特性名の検証」藤本勝次, 加藤一朗両先生古稀記念会（編）『藤本勝次，加藤一朗両先生古稀記念 中近東文化史論叢』（関西大学文学部史学地理学科合同研究室）, pp. 119–134.

大塚和夫 1996「スーダンのハルワ（クルアーン学校）：予備的報告」『上智アジア学』（上智大学アジア文化研究所）14, pp. 29–40.

大塚和夫他編 2002『岩波イスラーム辞典』岩波書店.

加藤博 1996「遊牧民：Minority or Vagabond?：近代エジプトにおける国家と遊牧民」『上智アジア学』（上智大学アジア文化研究所）14, pp.61–73.

苅谷康太 2012『イスラームの宗教的・知的連関網―アラビア語著作から読み解く西アフリカ』東京大学出版会.

川田順造 1976『無文字社会の歴史』岩波書店.

私市正年 2004『サハラが結ぶ南北交流』山川出版社.

小杉泰 1994「イスラームにおける啓典解釈学の分類区分―タフスィール研究序説」『東洋學報』76 (1-2), pp. 85–111.

小杉泰他編 2008『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会.

佐藤次高編 2002『西アジア史Ⅰ―アラブ』山川出版社.

竹田敏之 2009「アラビア語はなぜ語尾変化をするのか―現代アラブ世界の形成と文法学におけるイウラーブ論争―」『イスラーム世界研究』2(2), pp. 105–130.

――― 2010『現代アラビア語の成立とアラブ世界の形成―文法改革と現代標準語の普及を中心に―』京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士学位論文（未公刊）.

内記良一 1964「アラブ語における対義性について」『東京外国語大学論集』11, pp.125–142.

松本弘編 2013『現代アラブを知るための56章』明石書店.

三浦徹他編 1995『イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所.

宮治一雄 2000『アフリカ現代史―北アフリカ』山川出版社.

宮本雅行 2010「フォーラム ハッサーニーヤ語における仮定文の形式について」『言語研究』138, pp. 149–161.

――― 2011「ハッサーニーヤ語詩の形成とその分類について」『日本中東学会年報』27(2), pp. 83–101.

＜アラビア語文献＞

‘Abd al-Tawwāb, Ramaḍān. 1980. *Fuṣūl fī Fiqh al-‘Arabīya*. al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī.

———. 2002. *Manāhij Taḥqīq al-Turāth bayna al-Qudāmā wa al-Muḥdathīn*. al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī.

Būsamāḥa, ‘Abd al-Ḥamīd. 2008. *Riḥla Banī Hilāl ilā al-Maghrib wa-Khaṣā’iṣ-hā al-Tārīkhīya al-Ijtimā‘īya wa al-Iqtiṣādīya*. 2 vols, al-Jazā’ir: Dār al-Sabīl li-al-Nashr wa al-Tawzī‘.

al-Dulayshī, ‘Abd al-Laṭīf. 1981. *Min A‘lām al-Fikr al-Islāmī fī al-Baṣra: al-Shaykh Muḥammad Amīn al-Shinqīṭī*. Bayrūt: Mu’assasa al-Maṭbū‘āt al-‘Arabīya.（= 2009. *al-Shaykh Muḥammad Amīn al-Shinqīṭī: Ḥayāt-hu, Mudhakkirāt-hu, ‘Alāqat-hu bi-Mulūk wa-Shuyūkh al-Jazīra al-‘Arabīya*. Bayrūt: al-Dār al-‘Arabīya li-al-Mawsū‘āt.）

al-Ḥājirī, Ṭāhā. 1967. “Shinqīṭ aw Mūrītāniyā Ḥalaqa Mafqūda fī Tārīkh al-Adab al-‘Arabī,” *al-‘Arabī* Vol. 107, al-Kuwayt: Wizāra al-Irshād wa al-Anbā’, pp. 28–33.

Ḥanafī, Ḥasan. 2002. “Muqaddima,” in Ḥamāh Allāh wuld al-Sālim (ed.), *Dawr Mūrītāniyā fī al-Tawāṣul al-Fikrī al-Mashriqī - al-Maghribī*. al-Iskandarīya: Munsha’a al-Ma‘ārif, pp.5–7.

Ḥusayn, Ṭāhā. 1960. *al-Ayyām*. 3 vols, al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

Ibn Aḥmad, Muḥammad Maḥfūẓ. 1996. *Makāna Uṣūl al-Fiqh fī al-Thaqāfa al-Maḥẓarīya al-Mūrītānīya*. Nuwākshūṭ: al-Maktab al-‘Arabī li-al-Jāmi‘āt al-Thaqāfīya.

Ibn Būn (Būnā), al-Mukhtār ibn Muḥammad al-Sa‘īd. 2003. *Kitāb al-Iḥmirār: al-Jāmi‘ bayna al-Tashīl wa al-Khulāṣa li-al-‘Allāma Ibn Būnā*. ed. by ‘Abd Allāh ibn Muḥammad ibn ‘Abd Allāh Ibn al-Faqīh, 2 vols, Bayrūt: ‘Ālam al-Kutub.

Ibn al-Ḥusayn, al-Ṭayyib ibn ‘Umar. 1995. *al-Salafīya wa A‘lām-hā fī Mūrītāniyā, Shinqīṭ: ‘Arḍ li-Tārīkh*

al-Salafīya wa al-Ash'arīya wa Mā la-hu 'Alāqa bi-Dhālika min al-Ḥaraka al-'Ilmīya wa al-Jihādīya. Bayrūt: Dār ibn Ḥazm.

al-Idrīsī, Abū 'Alī Buḥayyid ibn al-Shaykh Yarbān al-Qalqamī. 2009. *A'lām al-Shanāqiṭa fī al-Ḥijāz wa al-Mashriq: Juhūd-hum al-'Ilmīya wa Qaḍāyā-hum al-'Āmma min al-Qarn al-Khāmis ilā al-Qarn al-Khāmis 'Ashar al-Hijrīyayn*. al-Riyāḍ: Dār al-Nashr al-Dawlī li-al-Nashr wa al-Tawzī'.

al-Jakanī, al-Ṭālib 'Abd Allāh ibn Muḥammad. 2004. *al-Īḍāḥ al-Sāṭi'*. ed. by al-Shaykh ibn Muḥammad ibn al-Shaykh Aḥmad, Ṭab'a Khāṣṣa li-al-Mu'allif.

al-Jamī'ī, 'Abd al-Mun'im al-Disūqī. 1983. *Majma' al-Lugha al-'Arabīya: Dirāsa Tārīkhīya*. al-Qāhira: al-Hay'a al-Miṣrīya al-'Āmma li-al-Kitāb.

Jīlānī, Aḥmad. 2008. *al-Huwīya wa al-Intimā' fī al-Mujtam' al-Mūrītānī: Dirāsa Maydānīya Anthrūbūlūjīya*. Kīfa: Dār Yūsuf ibn Tāshifīn wa Maktaba al-Imām Mālik.

al-Maghribī, 'Abd al-Qādir. 1953. "Majāmi'-nā al-Lughawīya wa Awḍā'-hā," Majalla Majma' al-Lugha *al-'Arabīya* Vol.7, al-Qāhira: Maṭba'a Wizāra al-Ma'ārif al-'Umūmīya, pp.123–128.

al-Maḥbūbī, Muḥammad ibn Aḥmad. 2012. *Adab al-Riḥla fī Bilād Shinqīṭ khilāl al-Qarnayn al-Thālith wa al-Rābi' 'Ashr al-Hijrī*. Ṭab'a Khāṣṣa li-al-Mu'allif.

Mawlāy, Muḥammad ibn Sīdī Muḥammad. 2008. *al-Tafsīr wa al-Mufassirūna bi-Bilād Shinqīṭ*. Kīfa: Dār Yūsuf ibn Tāshfīn wa Maktaba al-Imām Mālik.

Muqallid, Muḥammad Yūsuf. 1962. *Shu'arā' Mūrītāniyā al-Qudamā' wa al-Muḥdathūn*. al-Dār al-Bayḍā': Maktaba al-Waḥda al-'Arabīya.

———. 1999. *Mūrītāniyā al-Ḥadītha: Ghābir-hā, Ḥāḍir-hā, aw al-'Arab al-Bīḍ fī Ifrīqiyā al-Sawdā': Tārikh-hum, Aṣl-hum, 'Urūbat-hum, Aḥwāl-hum*. Bayrūt: Dār al-Kitāb al-Miṣrī al-Lubnānī.

al-Naḥwī, al-Khalīl. 1987. *Bilād Shinqīṭ: al-Manāra wa al-Ribāṭ*. Tūnis: al-Munaẓẓama al-'Arabīya li-al-Tarbiya wa al-Thaqāfa wa al-'Ulūm.

al-Rafī'ī, 'Abd al-Ḥusayn Ibrāhīm. 2012. *Dhikrayāt Safīr 'Irāqī*. 'Ammān: Dār Dijla.

Sa'dī, 'Abd al-Raḥmān ibn Nāṣir. 2001. *Taysīr al-Karīm al-Raḥmān fī Tafsīr Kalām al-Mannān*. ed. by 'Abd al-Raḥmān ibn Mu'allā Luwayḥiq, al-Riyāḍ: Dār al-Salām.

al-Shallāḥī, Rā'id ibn Sa'd. 2004. *Qaṭf al-'Anāqīd min Tarjama al-Shinqīṭī ibn al-Talāmīd*. al-Kuwayt: s.n.

al-Shinqīṭī, Aḥmad ibn al-Amīn. 2002. *al-Wasīṭ fī Tarājim Udabā' Shinqīṭ*. al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī.

al-Shinqīṭī, Lārabās ibn Muḥammad ibn Lmurābiṭ. 2008. *al-Dhakhīra fī Sharḥ al-Rasm wa al-Ḍabṭ wa Jadwala al-Muqri'*. Ṭab'a Khāṣṣa li-al-Mu'allif.

al-Shinqīṭī, Muḥammad al-Amīn ibn Muḥammad al-Mukhtār. 2005. *Aḍwā' al-Bayān fī Īḍāḥ al-Qur'ān bi-al-Qur'ān*. 7 vols, Makka: Dār 'Ālam al-Fawā'id. (Āthār al-Shaykh al-'Allāma Muḥammad al-Amīn al-Shinqīṭī (1), min Maṭbū'āt Majma' al-Fiqh al-Islāmī, Judda).

al-Sudays, 'Abd al-Raḥmān ibn 'Abd al-'Azīz. 1989. *Manhaj al-Shaykh al-Shinqīṭī fī Tafsīr Āyāt al-Aḥkām min Aḍwā' al-Bayān*. Makka: Jāmi'a Umm al-Qurā.

al-Suyūṭī, Jalāl al-Dīn 'Abd al-Raḥmān. 1998. *al-Muzhir fī 'Ulūm al-Lugha wa Anwā'-hā*. ed. by Fu'ād 'Alī Manṣūr. 2 vols, Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmīya.

al-Ṭawayān, 'Abd al-'Azīz ibn Ṣāliḥ. 1998. *Juhūd al-Shaykh Muḥammad al-Amīn al-Shinqīṭī fī Taqrīr 'Aqīda al-Salaf*. 2 vols, al-Riyāḍ: Maktaba al-'Ubaykān.

'Umar, Aḥmad Mukhtār. 1992. *Tārīkh al-Lugha al-'Arabīya fī Miṣr wa al-Maghrib al-Adnā*. al-Qāhira:

‘Ālam al-Kutub.

al-‘Uṣaymī, Khālid ibn Su‘ūd. 2002. *al-Qarārāt al-Naḥwīya wa al-Taṣrīfīya li-Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya bi-al-Qāhira*. al-Riyāḍ: Dār al-Tadmurīya.

Wuld Abāh, Muḥammad al-Mukhtār. 1987. *al-Shi‘r wa al-Shu‘arā’ fī Mūrītāniyā*. Tūnis: al-Sharika al-Tūnisīya li-al-Tawzī‘.

Wuld Abāh, al-Sayyid. 2000. *Mūrītāniyā: al-Thaqāfa wa al-Dawla wa al-Mujtama‘*. Bayrūt: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-‘Arabīya.

Wuld Ḥabīb Allāh, Aḥmad. 2009. *Shi‘r al-Ḥassānīya: al-As’ila wa al-Qaḍāyā wa al-Khuṣūṣīya*. Nuwākshūṭ: al-Maṭba‘a al-‘Aṣrīya.

Wuld Ibn Aḥmīda, ‘Abd Allāh. 2009. *al-Shi‘r al-‘Arabī al-Faṣīḥ fī Bilād Shinqīṭ: Mabḥath fī al-Nash’a wa al-Uṣūl*. Ṭarābulus: Manshūrāt Jam‘īya al-Da‘wa al-Islāmīya al-‘Ālamīya.

Wuld al-Nātī, Muḥammad al-Amīn. 2011. *al-Thaqāfa al-Shinqīṭīya Muqāraba Nasqīya*. Nuwākshūṭ: Markaz Najībawayh li-al-Makhṭūṭāt wa Khidma al-Turāth.

Wuld al-Sālim, Ḥamāh Allāh. 2002. “al-Muthaqqafūn al-Shanāqiṭa fī al-Mashriq al-‘Arabī: Murāja‘āt ḥawla Ṣūra Mūrītāniyā fī Ba‘ḍ al-Ādāb al-‘Arabīya al-Mashriqīya,” in Ḥamāh Allāh wuld al-Sālim (ed.), *Dawr Mūrītāniyā fī al-Tawāṣul al-Fikrī al-Mashriqī al-Maghribī*. al-Iskandarīya: Munsha’a al-Ma‘ārif, pp. 9–27.

———. 2005. *Mūrītāniyā fī al-Dhākira al-‘Arabīya*. Bayrūt: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-‘Arabīya.

———. 2010. *Tārīkh Bilād Shinqīṭī: Mūrītāniyā*. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.

———. 2012. *Ḥujjāj wa-Muhājirūn: ‘Ulamā’ Bilād Shinqīṭ (Mūrītāniyā) fī al-Bilād al-‘Arabīya wa-Turkiyā min al-Qarn al-Tāsi‘ ilā al-Qarn al-Rābi‘ ‘Ashar al-Hijrī*. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.

Wuld Zayn, al-Ḥasan. 2008. *al-Ṭurra: Tawshīḥ Lāmīya al-Af‘āl li-Ibn Mālik: bi-Khiyāṭa wa-Tarshīḥ al-Shaykh Muḥammad Sālim Wuld ‘Addūd*. ed. by ‘Abd al-Ḥamīd ibn Muḥammad al-Anṣārī. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.

Zabbāl, Salīm. 1967. “Nuwākshūṭ: Aḥdath ‘Āṣima fī Aqṣā Minṭaqa min Waṭani-nā al-‘Arabī,” *al-‘Arabī* Vol. 101, al-Kuwayt: Wizāra al-Irshād wa al-Anbā’, pp. 68–90.

al-Zubayr, Ghālī. 2013. *Naẓarāt fī al-Laḥja al-Ḥassānīya*. Mukhayyamāt al-Lāji’īn al-Ṣaḥrāwiyīn: Lārmātān- Rāṣd.

＜欧文文献＞

al-Any, Riyadh S. 1967. “Hassaniya, The Arabic of Mauritania,” in George L. Targer (ed.), *Studies in Linguistics* Vol. 19, Dallas, Texas: Anthropology Research Center, Southern Methodist University, pp. 19–24.

Arnaud, Jean. 1972. *La Mauritanie: Aperçus historique, géographique et socio-économique*. Paris: Le Livre africain.

Brustad, Kristen. 2000. *The Syntax of Spoken Arabic: A Comparative Study of Moroccan, Egyptian, Syrian, and Kuwaiti Dialects*. Washington, DC: Georgetown University Press.

Cohen, David. 1963. *Le dialecte arabe ḥassānīya de Mauritanie, parler de la Gəbla*. Paris: C. Klincksieck.

Dia, Alassane. 2007. “Uses and Attitudes towards Hassaniyya among Nouakchott’s Negro-Mauritanian Population,” in Catherine Miller and Enam Al-Wer et al. (eds.), *Arabic in the City: Issues in Dialect Contact and Language Variation*. London: Routledge, pp. 325–344.

Diagana, Ousmane Moussa. 1995. *La langue soninkée: Morphosyntaxe et sens à travers le parler de Kaédi (Mauritanie)*. Paris: L’Harmattan.

Du Puigaudeau, Odette, and Marion Sénones. 2000. *Mémoire du pays maure: 1934–1960*. Paris: Ibis Press.

———. 2002. *Arts et coutumes des Maures*. Paris: Ibis press.

Gerteiny, Alfred G. 1967. *Mauritania*. New York: Praeger.

Heath, Jeffrey. 2003. *Hassaniya Arabic (Mali): Poetic and Ethnographic Texts*. Wiesbaden: Harrassowitz.

———. 2002. *Jewish and Muslim Dialects of Moroccan Arabic*. London: RoutledgeCurzon.

———. 2004. *Hassaniya Arabic (Mali)-English-French dictionary*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Holes, Clive. 2007. "Kuwaiti Arabic," in Kees Versteegh (ed.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Leiden: Brill, Vol.2, pp. 608–620.

Ingham, Bruce. 2008. "Najdi Arabic," in Kees Versteegh (ed.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Leiden: Brill, Vol.3, pp. 326–334.

Lydon, Ghislaine. 2004. "Inkwells of the Sahara: Reflections on the Production of Islamic Knowledge in Bilād Shinqīṭ," in Scott Reese (ed.), *The Transmission of Learning in Islamic Africa*. Leiden: Brill, pp. 39–71.

Nicolas, Francis. 1953. *La langue berbère de Mauritanie*. Dakar: IFAN.

Norris, H. T. 1968a. *Shinqīṭī Folk Literature and Song*. Oxford: Clarendon Press.

———. 1986b. *The Arab Conquest of the Western Sahara: Studies of the Historical Events, Religious Beliefs and Social Customs which Made the Remotest Sahara a Part of the Arab World*. Burnt Mill, Harlow, Essex: Longman.

Pavard, Claude.1999. *Mauritanie*. Paris: Editions Hazan.

Pazzanita, Anthony G. 2008. *Historical Dictionary of Mauritania*. Lanham, Md: Scarecrow Press.

Rabin, Chaim. 1951. *Ancient West-Arabian*. London: Taylor's Foreign Press.

Sounkalo, Jiddou. 2008. *Spoken Hassaniya Arabic*. Hyattsville, MD: Dunwoody Press.

Taine-Cheikh, Catherine. 1989-1990. *Dictionnaire ḥassānīyya français: Dialecte arabe de Mauritanie*. Paris: Geuthner. [6 vols, hamza-ṣād, published to date.]

———. 2007a. "Ḥassāniyya Arabic," in Kees Versteegh (ed.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Leiden: Brill, Vol.2, pp. 240–250.

———. 2007b. "The (R)Urbanization of Mauritania," in Catherine Miller and Enam Al-Wer et al. (eds.), *Arabic in the City: Issues in Dialect Contact and Language Variation*. London: Routledge, pp. 35–54.

———. 2008. "Mauritania," in Kees Versteegh (ed.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Leiden: Brill, Vol.3, pp. 169–176.

Tauzin, Aline. 1993. *Contes arabes de Mauritanie*. Paris: Editions Karthala.

Tolba, Anne-Marie, and Serge Sibert. 1999. *Villes de sables: Les cités bibliothèques du désert mauritanien*. Paris: Hazan.

Versteegh, Kees. 1997. *The Arabic Language*. New York: Columbia University Press.

※本研究は、JSPS 科研費（若手研究Ｂ「現代アラビア語の変容に関する実証的研究」課題番号：24710287）の助成を受けたものである。